



会計士資格は ホライズンの先にある 新しい挑戦へのパスポート

有限責任監査法人トーマツ パートナー / 前IFRS財団アジア・オセアニアオフィス ディレクター
竹村 光広 Mitsuhiro TAKEMURA



慶応義塾大学商学部卒業後、『慶応・デロイト スカラシッププログラム』(当時)を利用し豪州メルボルンで2年間の実務研修を受ける。帰国後はトーマツの監査部門及び税務部門で国際業務をメインに従事。2008年より企業会計基準委員会(ASBJ)及び国際会計基準審議会(IASB)の研究員を務め、2012年10月に東京の開設されたIFRS財団アジア・オセアニアオフィスの初代所長に就任。5年8か月の任期満了後、トーマツに帰任し、現在、監査部門のパートナー。

大手会計事務所では、監査から税務へと業務をシフト。ASBJやIASBの研究員として会計基準の開発に携わり、さらにIFRS財団アジア・オセアニアオフィスの所長に就任するなど、大きくキャリアを変遷しながら走り続けてきた竹村氏に、これまでの歩みや会計士資格のバリューについて伺った。

ホライズンの先にある 挑戦を求めて

一まずは、会計士とか海外を目指したきっかけをお聞かせいただけますか。

最初から会計士を目指していたわけではなく、海外を意識していたわけでもありません。何となく“目の前にあることを頑張ることが良いことだ”“勉強することは良いことだ”という考えで、一所懸命勉強したら東京の大学に受かって、商学部でしたので周りに会計士試験を受ける人がたくさんいたため興味を持ったという、何気ないきっかけでした。周囲の会計士を目指していた学友たちは、自由さとか職業的安定を求めている人も多かったと思いますが、私はそこは少し違っていた気がします。漠然とですが、何か面白いこと、予期しないことを求めているように思います。在学中に会計士試験に合格して選んだ就職先はいわゆる外資系の監査法人でした。JICPAの藤沼

元会長も外資系だったと思いますが、当時は外資系監査法人というのがあって、チャレンジ精神旺盛な人たちが集まってきました。

いわゆる“ホライズン”を求めているのですね？

そうかもしれませんね。地方出身者なのでいったん東京に出てくるステップを踏んでいるから、その先に進むのもあまり躊躇がなかったのかもしれませんが。英語は全然自信がありませんでしたが、何とかするのはないかと軽く考えていました。若かったですし。ホライズンを求めて外資系監査法人に入ったものの、私自身がまったく使いものにならなかった。もちろん、経験が圧倒的に不足していたのは当然ですが、外資系というのは手取り足取りは教えてくれませんし、自分自身もどうしたら良いのかわからなかった。そんな折、大学のゼミの先生から、「デロイトと慶応義塾大学が共同主催する留学プログラムが発足するからオーストラリアに行ってみないか」という声がかかります。就職したばかりで悩みましたが、結局、勤務していた監査法人を退職することを決意。オーストラリア・メルボルンに留学し、大学に通いながら現地のデロイトの事務所で働くというプログラムに2年間参加することになりました。留学といっても実際には大学にはほとんど通えなかったのですが、そこで英語力を身につけ、実務経験を積むことができ

ました。また、現地の日本企業に勤める駐在員のネットワークの中で、諸先輩方から社会人として生きていく上でのヒューマンスキルのようなものを教えていただきました。一方、デロイトの事務所に行けば完全に外国人の世界で、拙い英語で苦しい思いをしましたが、そんな中でも自分ができる業務で価値を示せるようにと努力しました。今となっては良い思い出です。

一若いうちに海外を経験するメリットについてどのようにお考えですか？

一歩だけ先に行けて、少しだけチャンスが増えます。いったん日本に帰国して働きだすと、なかなか2回目が行けないですよ。かくいう私も、次の海外赴任までずいぶん間が空くのですが、2回目の海外となると何のために行くのか意味を見つるのが難しかったですね。1回目を早く行くと、その分だけまだ若いので、少しだけですけど人よりも選択肢が多くなると思います。この「少しだけ」っていうのが大事な気がします。30歳くらいに初めて海外に行っていたら、たぶん、その後IASBで働くことはなかったと思います。

そのオーストラリアでの研修プログラムを終えて帰国し、そのままデロイトの提携先であるトーマツにお世話になります。国際部に配属されているんな会社に監査に行くのですが、特に外資系の証券会社の監査業務にアサインされたことが印象に残っています。外資系ですから、日本の大

企業を監査するトーマツの中ではメインストリームではないと思うのですが、とても面白かったですよ。デリバティブなんて当時は最新の知識も身につけ刺激でした。日本の大企業の金商法監査にも、アサインしてもらったのですが、日系のSEC登録企業の監査も経験したくて、ずっと要望を出し続けていました。ところが、なかなかチャンスが巡ってきません。このまま待っていてもポジションが回ってくるかどうか分からない…そんな状況の中、実は官公庁への出向など色々な話があったのですが、結局、30歳の時に自分が選んだのが税務の道でした。生涯税務の道で生きてゆくところまで覚悟を決めていたわけではありません。自分の税務の知識不足を監査をやっていた時から痛感していたので、スキルアップが必要と考えました。監査の現場で、クライアントの方と話す時「会計士だから税務について知ってますよね？」といった感じで質問を受けることが結構あるのですが、まったく答えられない。苦手意識があったので、このままポジションが空くの待っているのであれば、税務の勉強したほうが良いと思ったのです。会計はソフトなルールですが、税は強制力のある法律なので、それを学ぶことにも魅力を感じました。私よりも先に監査部門から税務部門に移った先輩方に相談したりしているうちに、その選択は間違いないと確信を得るようになっていました。キャリアチェンジする時に大事なものは、色々な人の話を聞くことだと思います。色々なことを言われて、ネガティブなことも言われますが、それでも自分の決意が変わらなかつたら、その道は間違いない、そういう判断でした。

自分の知識を渡して 新しい知識を獲得

—未経験の税務にキャリアチェンジしてご苦勞はありませんでしたか？

税務のことは全然わからないので最初腰を低くして、教えてくださいというスタ

ンスで入っていきました。定期的にキャリアチェンジすると、天狗にならなくて良いですよ。その時に気づいたのですが、確かに税務は素人でしたが、税務と会計は密接にリンクしていますので、監査の経験を生かせる場が結構あるんです。オーストラリアでの海外経験と外資系証券会社での経験も大いに役に立ちました。ニーズのあるところって、やっぱり国際と金融なんですね。そういう経験を生かして仕事をしつつ、税務の知識を勉強しました。税務はたいへんやりがいのある仕事で、ずるずるとのめり込んでいきました。国際税務がメインだったのですが、英語ができるので、どんどん仕事が入ってきました。ですが、正直言って、仕事はかなりハードでした。量だけでなく、プレッシャーが半端なかったです。そろそろ辞めようかなと思った頃にパートナーに昇進。それからまた4年ほど奮闘しました。最後は、上手く言えませんが、いろんな意味で「潮時」を感じて、次に何をしようかと考えていた時に、新聞でIASBの研究員を募集しているという記事を見つけ、「これだ!」と思ってすぐに応募しました。

—IASBは、いかがでしたか？

IASBに入った動機は、いろいろあります。税務をやっているときに、他人が作ったルールを説明するだけではなく、自分でルールを作りたいと思っていました。IASBはまさに国際的な会計のルールを作っている組織です。オーストラリアから帰国してからずっと国内だったので、そろそろ海外に行きたいと思っていました。オーストラリアの時の上司が国際機関出身だったので、国際機関で働くことには昔から興味がありました。あと、Sir David Tweedieをはじめとして、当時のIASBには錚々たる人がそろっていて、そんな人たちと働いてみたいと思いました。あらゆる面で、自分が求めていることのチェックリストが埋まるような感じで、この選択で間違いないと100%の確信が持てました。税務から基準設定主体への転換は、監査から税務への転換よりもぎつかったです。歳もそれなりに取っていましたから、でも、

また、教えてくださいというスタンスで、監査から税務に移るときに会計の知識を売りながら税務を勉強したように、税務から基準設定に移るときには、税務の知識を売りながら基準設定について学びました。IASBのスタッフは監査やアカデミック出身の人が多く、税務はみんな敬遠していましたので、税務がらみのプロジェクトはすべて私のほうに回ってきました。在任中にIAS第12号『法人所得税』の改定プロジェクトを終わらせることができたのですが、IASBのプロジェクトを終わらせたのは日本人では私が初めてだそうです。そこで実感したのは、今まで自分のキャリアを通じて積み上げてきたものは自分の財産だから、絶対に捨ててはだめだということ。もったいないですよ。わらしべ長者ではないですが、持っている知識を渡して、新しい知識を得ることは、非常に大事だと思いました。IASBというのは実はすごい組織で、IFRSの知識はもちろんですが、国際的な組織運営であったり、世界中の違った意見を取りまとめるコンセンサス形成であったり、いろんなノウハウを持っているんです。IASBで働いて得たものは非常に大きかったと思います。出向期間が終了して、いったんデロイトに戻り、ロンドン事務所欧州マーケットの開拓をしていたのですが、ある時、IFRS財団のアジア・オセアニア事務所を設立したので、その所長にならないかとお声がかかり、自分でお役に立てるのであればという想いで引き受けさせていただきました。

—同じ分野の延長ではなく、何年かおきに新しいフィールドに取り組みまれて、どんどん知識の蓄積が増えていくというスタイルは非常に個性的ですね。

ありがとうございます。当時だったら他のファームや金融機関の税務部門に移籍して高い報酬を得るとい人も結構いました。実際に、そういったところからお声がかかっていたのも確かです。でも、なぜそうしなかったかということ、サステイナブルではないような気がしました。今ある知識を使い尽くしたらおしまいではないですか。金

融機関の税務部門に移って給料が上がっても、いつまで続くかわかりませんし。それよりは、面白さとサステナビリティ、そしてなにより新しい知識と経験の習得を優先しました。IFRS財団のアジア・オセアニアオフィスの所長就任当初は民主党政権下で、“IFRSは終わった”と、世間的には冷やかなトーンで語られていましたが、IFRS財団の評議員がリーダーシップをとって潮目を変えていくことができたと思います。当時IFRS財団には、議長だったプラダ氏や元JICPA会長の藤沼氏、元住友商事副社長の島崎氏などがいました。これらの方々と一緒に仕事できたことは私にとって大きな財産です。あと、JICPAから力強いご支援をいただいたことも強調させていただきます。私もJICPAの会員ですから、たいへん心強く思いました。

—ありがとうございます。それでは最後に、若い会計士の方々へのメッセージをお願いいたします。

皆が同じではないので、同じことをやらないで良いと思うのですよ。人それぞれに向き不向きがありますから、それに合わせたキャリアプランで良いのではないかと思います。あまりたいしたメッセージもないのですが、会計士は非常に良い資格だと思いますよ。“これから監査がどうなる？”とか“AIの発達によってなくなってしまうのではないか？”という話もあります。確かに、この先、業務は変わっていくとは思いますが、会計士という仕事自体はなくならないと思います。個人的には監査よりも税務のほうが面白かったですが、会計士は監査も税務も、また、コンサルティングもできます。それ以上に、会計士という資格は世界に出るパスポートになり得るものです。税法は基本的に国内だけでしか通用しない知識です。イギリスに行ったら日本の税法の知識なんてあまり役に立たない。イギリスの税法を勉強してもイギリス人にはかなわないし。法律というのは国単位なので、その国にいないと第一線の専門家とみてもらえない。しかし会計は世界中、どこどの国に行っても通用する。会計基準はほぼ

IFRSに収れんしていますし、海外で資格の違いを感じたことは全くありません。それは大きな魅力だと思います。そういった意味では、もっともっと海外に打って出る人材が増えてもいいのではないかと思います。監査の世界でも国際化の波は止められなくなって、これから国際業務ができないとやっていけない、そんな時代がもう目の前に来ています。逆にそれが会計士という国際的なパスポートを持っている私たちにとって、新たなホライズンへ漕ぎ出すチャンスでもあると思うんです。海の向こうには、日本よりもずっと広い世界が広がっているんですから。

このインタビューは2018年8月6日に実施されました。



〒102-8264 東京都千代田区九段南4-4-1
TEL:03-3515-1120(代表)
03-3515-1130(国際グループ)
<http://www.hp.jicpa.or.jp/>